

漢碑の文字学的研究序説

青 木 菟 哉

(内 容)

一、序 論

二、隸釈・隸統の文字学的性格

三、金石萃編所収漢碑の文字学的性格

四、漢碑の文字と説文との関係

一、序 論

本論考はさきに東京教育大学漢文研究室の漢魏文化研究室が、文部省の助成金を得て行った研究の一端で、去る三十二年二月、同研究班主催の定例研究会の席上で陳述した小論をまとめたものである。

漢碑をその文字の性格から分類すると、篆文刻石・古隸刻石・隸書刻石の三系統に分つことができるが、この分類は文字学上の文字の歴史的変遷ともおよそ一致する。漢代に用いられた文字の主流と称されるものは、いわゆる隸書であり、漢碑を主とする漢代の刻石の多くは隸書体によつ

て記されている。吾々は現存する刻石あるいは拓本・著録等を通して、漢代における文字使用の実際の形態を窺うことができ。現在までに著録されている漢碑を時代別に区分すると、前漢のものは極めてすくなく、後漢のものが大部分である。

前漢の刻石の書体は秦代の余流を承けて古隸が多く用いられ、また古隸から隸書に演進する過渡的な書体も見られるが、後漢に入ると、いよいよ隸書が完成され、隸書体による多くの刻石が出現した。しかし同一の時代においても、その用いられている文字の実際は、一般にいわれている文字の歴史的変遷のごとく単線型で進んでいるとは限らず、複線型をとつて種々の文字が行なわれている。この現象は例えば、後漢延光二年(一二三)の開母廟石闕銘は篆文で書かれ、後漢永和二年(一三七)の敦煌太守裴岑紀功碑は古隸で書かれていることに徴しても分る。これらは当時の主流であつた隸書の碑文と並行して建てられているの

である。また隸書の個々の字体について見ても、それは文字の構造上、古文・籀文・篆文の何れかに基づいてできており、若干の文字に漢代の俗字と思われるものが認められる。隸書とはこのような文字の集合体であり、古文・籀文・篆文をぬきにしてその構造を理解することは困難である。

この論考の目的は、隸積・隸統・金石萃編を他の著録に見られる漢碑について、その文字学的諸相の一端を考察しようとするものである。

二、隸積・隸統の文字学的性格

漢碑の収録とその研究を兼ねた書物の中で、もっともすぐれているものは隸積と隸統であろう。この二書は主に漢碑を搜集して摹刻し、かつ各碑について該博なる考証を試みているが、いま焦点を文字の面に絞って考察すると、文字学上から特に三つの価値を指摘することができる。すなわち、「文字の構造の変遷」「書法」「文字の仮借的用法」である。

一、文字の構造の変遷

(1) 筆画に変更のないもの（原碑と隸積と文字が同一構

造）

方周禮職方氏

河河南山鎮

春春秋伝

石銘勒斯石

物既成万物

川地理山川

天天子展義

守山嶽之守

（出典・西嶽華山廟碑）

(2) 筆画に変更のあるもの（原碑と隸積と文字の筆画がちがう。別表(一)参照）

二、書法

隸積・隸統の文字の筆勢はすべて楷書式筆法に変わっている。

三、文字の仮借的用法（漢碑には文字の仮借的用法が多く、解義に際しては文字の本義、仮借義の關係を特に注意すべきである）

旋機（旋機の仮借） 祝圖（祝故の仮借） 浩倉（昊蒼の仮借）

（出典・堯廟碑）

沂（垠の仮借） 奔（亦の仮借） 汁（叶の仮借）

（出典・帝堯碑）

不夏（不暇の仮借） 刑（形の仮借）

（出典・德彼の仮借）

胡輦（胡璉の仮借） 伎（暨の仮借）

（出典・孔廟孔碑）

於氏（於是の仮借） 郎（廊の仮借） 術（述の仮借）

（出典・孔廟後碑）

格

三、金石萃編所収漢碑の文字学的性格

文字学上から見た隸積・隸統の特に注目すべき点はおよ

そ上述のごとくであるが、現在伝わっている隸釈・隸統はすでに原本とは体裁を異にしているから、文字の構造および筆法においてその旧態を失っている部分がすくなくない。したがって漢碑の文字の精密な研究は隸釈・隸統をさかのぼってさらに原碑またはその拓本によるのでなければ充分なる成果を挙げることはできない。しかし漢碑の全てが現存するわけではなく、ことごとく拓本に依據することも不可能であるから、今ここには比較的原碑の文字の面目を留め、今本の隸釈・隸統よりもその資料的価値が高いと認められる清・王昶の金石萃編を底本として漢碑の文字を研究することが、文字学上さらに必要であると思われる。金石萃編所収の漢碑と隸釈・隸統とを比較すると、両者に共通して収録されている碑文は相当多数に上っており、これらを相互検討すると、彼此の文字には大小無数の異同が発見される。今、両者を比較してその結果得られた金石萃編の文字学的意義には、前項と共通する「文字の仮借的用法」以外に注目すべき事項としては「書法」「文字の構造」の二点であるが、この何れの面についても金石萃編の文字学的優位性が認められる。

一、書法

金石萃編によると、漢碑の大部分は隸書で書かれていることが明瞭であるが、中には篆文・古隸に依っているものもある。次のごときがこれである。

〔篆文刻石〕

上谷府郷墳壇刻石 居撰二年(七)
 祀三公山碑 元初四年(一一七)
 開母廟石闕銘 延光二年(一二三)
 嵩嶽少室石闕銘 延光二年(一二三)

〔古隸刻石〕

魯孝王刻石 五鳳二年(B.C五六)
 萊子侯刻石 始建國天鳳三年(一六)
 開通褒斜道刻石 永平六年(六三)
 會稽家地刻石 建初元年(七六)
 延光殘碑 延光四年(一二五)
 敦煌太守裴岑紀功碑 永和二年(一三七)

二、文字の構造

隸釈系統の漢碑の文字の構造については前項に略述したが、ここにはさらに進んで金石萃編所収漢碑と隸釈・隸統とを比較対照した結果の事象を概説し、金石萃編の資料的価値を認めると共に、隸釈・隸統には文字の偽体が多いということを指摘したい。

(1) 筆画の異同(金石萃編の漢碑と隸釈・隸統とも比較すると文字の筆画の異同かおびただしい。何れも金石萃編が正しい。別表(参照))

(2) 文字の異同(隸釈・隸統では原碑の文字が全く変っているもの、重文の形態、文字の磨滅などの諸相を注意す

べきである)

(イ) 文字が全く異なるもの

錢給大酒直(隸積は「犬」を「大」に作る) (出典・百石孔詠碑)

功垂无窮(隸積は「无」を「无」に作る) ()

玉帛之贄(隸積は「玉」を「玉」に作る) (出典・西嶽華山廟碑)

稽成玄鑑(隸積は「成」を「度」に作る) ()

熹平二年三月六日郎官奉宣(隸積は「六日郎」を「兖西」に作る) (出典・史晨饗孔廟後碑)

感不戮仁(隸統は「感」を「戒」に作る) ()

熹平二年二月廿二日(隸統は「太」を「一」に作る) (出典・楊准表記)

山陽太守(隸統は「太」を「大」に作る) ()

()

()

(ii) 重文の形態

同一文中に重複して用いられている文字で、これに

は前後その構造を異にしているものおよび前後同一の

ものことがある。例えば、泰山都尉孔宙碑の「孔君之

銘」「勅銘」の「銘」、耿勳碑の「右扶風」「穆如風

清」の「風」、博陵太守孔彪碑の「師禮不爽」「據

師」の「師」などは、前後異体をなしているが、隸

釈、隸統では同一に書き替えられている。またこの現

象とは逆に史晨祀孔子秦銘の「死罪死罪」の「罪」、

楊准碑の「准字伯邳」「伯邳從弟」の「邳」のごとき

は、前後同一であるにもかかわらず、隸釈・隸統では異体である(別表(四)参照)

(ii) 漢碑の伝存と文字磨滅の状態(隸釈・隸統の依拠した漢碑にあつた文字が、金石萃編ではすでに磨滅して

いるものがある)

請置百石卒史一人(卒史)・萃編では磨滅)

(出典・百石孔詠碑)

少習家訓(「家」・萃編では磨滅) (出典・孔宙碑)

漢三百八十有七載(「八十有七載」・萃編では磨滅) ()

()

(3) 漢碑文字の一字数体(二体・三体のものは無数である

から、文字の使用は極めて自由であつたとみられる。別

表(四)参照)

四、漢碑の文字と説文との関係

漢碑の大部分は隸書であり、そのうち若干のものが篆書

や古隸で書かれていることはすでに上述したが、文字学史

上から見た漢代の文字使用の実際は、漢書の芸文志や説文

の叙にも明記されているように、前漢には篆文や古隸が流

行しており、また隸書や草書の萌芽も見られるが、これら

については現存する金石文あるいは木簡文に徴しても実証

することができる。後漢はこのような文字の変遷過程の上

にあるのであるが、特に隸書と草書とが盛んに行なわれた

と考えられる。今、漢碑の字体を説文と比較してこれを文字の構造上から分類すると、(一)古文(二)籀文(三)篆文(四)其他に区分することができるが、これらの形態を明らかにすることによって、漢代の文字の実相が分ると共に一方、説文の誤りを正し、その文字の不備をも補うことができる。漢碑は実に漢代文字の実体を留めており、最も確實にして資料価値の高いものである。

一、篆文刻石の文字

現在明らかにしうる漢碑の中で、篆文で書かれているものの例は上に指摘したが、漢代の篆文はその外碑額や石刻題字などにも散見する。これらの篆文を説文と比較すると

(一)筆画の一致するもの(二)筆画の異なるもの(三)説文未収のものなどがあり、また籀文体の混入しているものもある。

(別表(四)参照)

二、古隸刻石・隸書刻石の文字

古隸刻石の文字はおよそ隸書刻石と同じである。隸書はその構造上、古文・籀文・篆文の各体に基づいており、中には漢代の俗字も入っている。故に隸書によって書かれている漢碑の文体は、今古文字の併用体ということができ(別表(五)参照)

——一九六〇・三・二〇——

(東京都立小山台高等学校教師)

別表(一)

景(隸) 景(拓) 際(隸) 弋(拓) 淵(隸) 淵(拓)
 初(隸) 初(拓) 从(隸) 以(拓) 叫(隸) 可(拓)

(北海相景君銘)
 (西嶽華山廟碑)

別表(二)

辭(華) 辭(隸) 衰(華) 曹(華) 曹(隸)
 款(華) 隸(隸) 孟(華) 孟(隸) 下(華) 下(隸)

(石孔龕碑)
 (楊淮碑)

別表(三)

銘(華) 銘(華) 隸(華) 銘(華) 銘(華)
 帥(華) 帥(華) 隸(華) 帥(華) 隸(華)
 罪(華) 罪(華) 隸(華) 罪(華) 隸(華)

(泰山都尉孔宙碑)
 (耿勲碑)
 (博陵寺孔彪碑)
 (史晨記孔子奏銘)

邛邛 (繞) 萃綿は共に邛に作る

(揚 淮 碑)

別表四

年丰季季丰 (年)
恭恭恭恭恭 (恭)
處處處處處 (處)

別表五

○筆画の異なるもの

三山碑
説文四

全上
説文山
嵩嶽少室石闕銘

西嶽華山廟碑
説文山

開母廟石闕銘
説文

○籀文

嵩少室石闕銘

開母廟石闕銘

○説文未収

仙

仙父唐公房碑額

敬

嵩少室石闕銘

佐

上

別表(六)

古文

冢

孔謙錫
說文

還

夏承碑
說文

明

夏承碑
說文

籀文

冢

劉脩碑

冢

夏承碑
說文

冢

東山都尉孔宙碑
說文

冢文

九

北海相景君碑
說文

冢

帝堯碑
說文

冢

石經殘字
說文

其他

冢

韓勅西側題名

冢

吳仲山碑

冢

張紉碑

甚

孫振碑

冢

韓勅碑陰